

聖フランシスコの「清貧」の精神と現代社会



著者自宅の庭にある聖フランシスコの像

新連載

第1回

個人の心の平和

神谷秀樹 MITANI HIDEKI

東京大学生産技術研究所、
同医科学研究所シニアアドバイザー

聖人と教皇の教え

初めにアシジの聖フランシスコ（以下「聖人」と呼ぶ）と教皇の教えの違いを考えてみたい。私には、聖人の教えはもっぱら神の前における「個人」の信仰と生き方についてのものである一方、教皇のそれは二〇一四年に発表された使徒的勧告『福音の喜び』でも、また一五年の回勅『ラウダート・シ』でもそうであるように、視野を全世界の現実の人間社会、そして地球全般の現況に広げておられることではないかと思える。

私が聖人の教えを学ぶ教科書は、ラザロ・イリアルテの『聖フランシスコと聖クララの理想』（聖母文庫）が中心で、本書はほとんど毎晩どこか数ページを読むというほどの愛読書だ。私は本書から人生の指針となるものを日々頂戴している。

聖人の教えは、前述の通り、あくまで信徒一人ひとり、自分「個人」を見つめるためのものだったのではなからうか。彼が作った「会則」はあくまで十数人の小さい組織だった「兄弟会」のためのもので、全世界の信者に従うことを求めるものではなかった。

もともと、彼が宣教した相手は、アシジの森や山に住む鳥たちや狼といった「住人」をも含み、地域的に

はウンブリア地方からトスカーナのシエナ、フィレンツェ、アレツツオなどにも及び、教皇に会うためローマにも行った。さらに聖人は第五次十字軍が遠征しているエジプトにまで足を運んだ。そして後継者のフランシスコ会の神父たちは、南蛮船に乗り、イエズス会の神父たちと同じくはるばる日本までやってきた。イエズス会の創立メンバーの一人であるフランシスコ・ザヴィエルも、現教皇も「フランシスコ」を名乗り聖人に倣った。日本に来た宣教師の中から、豊臣秀吉の時代に長崎の西坂で処刑される殉教者も出た。

しかし、ここに述べたごとく、その宣教範囲は極めて広いものの、聖人が訓戒や書物に示されたものは、あくまで「個人の信仰」（個人の心のあり方）についてのものであったと、私は考えている。

これに対して教皇の教えについては「ニュースVA」というインターネットのサイトで、日々教皇がなさったこと、発表されたこと、ツイッターの一言に学んでいる。また『福音の喜び』は何ページにもわたって印をつけ、折に触れて読み返している。そして、教皇の教えを一日一ページ読むように編纂された『*Year of Mercy with Pope Francis*』は、寝る前のひと時、

一日を振り返る機会を提供してくれる。

教皇が示されるものは福音の喜びに始まり、広く世界の政治・経済・社会の関心事に及んでいる。それは現代人が最も求めるもので、私をはじめ、「正しい『解』が何であるのか、必ずしも自分では判断できない社会の対立点」（貧富の格差、同性婚、地球温暖化、中東問題など）に関して、教皇は明確な指針を示されたし、そのどれもが私にとっては心から合意し、受け入れることのできるものだった。

本連載では「原点」である「聖人の教え」と、またそれに添った「現代」に生きる人類への指針である「教皇の教え」と、両方について、まことに拙い持論を披露させていただくが、順序としてはまず、私自身がどのように聖人の教えに接し、それを心の中に消化してきたかを説明することから始めるのがよいと思う。

私の聖人との出会い

私が最初に聖人のことを考え始めたのは、恐らく辻邦生によるイタリア旅行記『美しい夏の行方』（中公文庫）を読んで、彼の言う「フランチェスコ的自由」というものに強い憧れを持ったときではないかと思う。



アジジの朝

当初は憧れただけで、何を意味するのかよく理解できなかった。本書に接したのは、恐らく四十代の頃で、憧れを持つものの実感はなかった。しかし時を経て、また聖人の教えを学ぶに従い、だんだん理解できるようになってきたと思う。少々長くなるが、私が心を捉

えられた部分を以下に引用する。

「太陽も青空も風も花々も泉も緑の大地も聖フランチェスコ的な自由さの中に立つと、そのものだけで、歡喜の対象となる。ぼくは青空を過ぎてゆく雲を仰ぎ、また野に咲く花を見て、何とこの地上は（よき贈り物）に満ちているのか、と心底から酩酊したものだ。／もちろん聖フランチェスコのような無所有に達することはできなかったが、すくなくとも自己中心の小さな圏から外に出なければ、強烈な詩的高揚に達しないことは理解できた。ぼくが詩を失い、枯渇した無感動の中でよくよと日を送っているとき、気がつくとき、きまつて自己中心の小さな圏にいて、つまらぬ利害のあれこれに支配されているのだ。／そうした欲求を振り払い、自己の圏を越え、高く飛翔してゆくにつれて——青空も花々も風も兄弟のように、ぼくに向かってほほえみ、話しかけてくる。こんな豊かな美しいものに満ちている地上にいて、どうしてそれに気がつかなかったのだろうか、という強い感動（むろん悔恨もそこにある）が身体を貫いてゆく。／聖フランチェスコは病氣や死までを兄弟として愛していた。無所有もそこまで達

すれば、地上に怖れるものはないはずだった。／アツシジの町のたたずまいがいかに清らかな貧しさによって作られているか。ぼくはアツシジの細い石段を下りながら、単純な隠れた生活のすばらしさについて考えていた」

私は二〇〇七年五月三日、結婚三十周年の記念日を家内とアツシジで過ごすことができた。しかしこのとき（私が五十四歳、洗礼を受ける三年前）、私はまだ辻が書いた「聖フランチェスコ的な自由」とはどんな自由なのか想像できる境地にはなかつた。

聖人が教える「無所有」という概念とともに、私が悩んだ教会の教えは「スチュワードシップ」というものである。教会では常に「あなたの所有する時間と才能と財とを世のためになるよう使いなさい」と言われるが、いったいどうしたらそれを実行できるのかというところに、私自身なかなか解を見出せなかつた。

私は六十歳を過ぎたときに、それまで続けてきた営利目的の投資銀行家としての仕事からは引退することを決めていた。そして、この教えのように「スチュワードシップ」を実行したいと望んではいたのだが、個別具体的にいったい何をしたらよいのか、その道をす

ぐに見出すことができたわけではなかつた。

また仕事については、もう一つ考えることがあった。フィレンツェのドゥオーモ博物館にあるミケランジェロの『ピエタ』を観たとき、私にはどうしてもそれが「通常の人間が大理石の塊から掘り出せるもの」とは思えなかつた。しばし考え込んだ後、「これはミケランジェロの手が神の手となり、神が彼の手を使って彫り出したもの」と結論し、やつと納得できたのである。それからは、「人間には自分で選んで行う仕事と、聖霊の呼びかけによって行う仕事（マリアがイエスを受胎



ミケランジェロ作『ピエタ』
ドゥオーモ博物館（フィレンツェ）

したように」と二つある。この世で本当に価値ある仕事とは、前者よりむしろ後者だ。自分もそのような仕事をしてみたい」と考えるようになっていた。

イエスの呼びかけに応じ、魚網を置いて従ったアンデレとシモン・ペトロの兄弟。財をすべて捨てて聖霊の呼びかけに応えた聖人。立派な仕事とは、「捨てること」を通して初めて得るものだということが、だんだんおぼろげにわかってくるようになったが、これから長い老後を過ごすのに、実際には今、全財産を捨てるということはできない。「捨てることができるもの」「捨てることのできないもの」、また「捨てるべきではないもの」とは何かを考えながら、今も自分の人生を歩んでいることに変わりはない。

私が捨てることのできたもの、それは「強欲資本主義者」が生きる社会で、彼らとどうにか折り合いをつけながら、自分の理想に少しでも近いところでそれなりの収益を上げようとする「営利目的の投資銀行業務」だった。これ以上お金を稼ぐための仕事を続けようとは思わなくなっていた。また財に関して、さらに「もっと、もっと」と求め続けて生きているのでは、かえって大事なものを失うということは、自分の心の奥深

くで十分に理解していた。

大学を出て、銀行業務を自分の「職」として三十八年生きてきた。日本の銀行に入る「就社」。投資銀行業務という専門職に生きていることを決めて、ウォール街に仕事場がある米国投資銀行への転職による「就職」。さらに、自分自身の経営方針で生きていこうと決めて行った「独立」。三十歳のときにアメリカに来てからは「アメリカン・ドリーム」（富と名声の獲得）を追うことはよいことだ、それが自分や家族を幸福にする道でもある」と妄信して生きた。しかし、神が呼びかけてくれる声が、そんな私の耳にもだんだん聞こえるようになってきて、六十歳を迎えたときは、もうこの仕事をし続けようとは思わなくなっていた。

引退し、「後を託す者（特に経営理念を継承できるリーダーとしての有資格者）がいらない」と結論したときには、二十二年間続けた会社も一代限りの会社として営業を終わらせることにした。それはもちろん当初から考えていた結論ではなく、苦渋の上の判断だった。日本人個人としては初めてウォール街に創業した投資銀行であり、二十二年間経営した会社だけに、未練・愛着がなかったわけではない。しかし、店を閉めるというこ

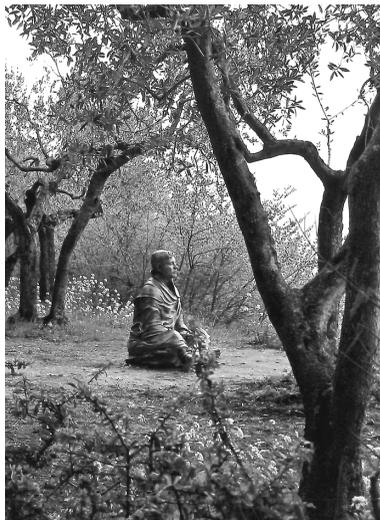
とが、与えられた状況の中で、最善の結論だということに、私も妻も迷いはなかった。

私にとつての「スチュワードシップ」

過去に後ろ髪を引かれるよりは、前を向いて生きることに傾注することにしたが、そんな自分の前に、実際に「新たな道」を神が示してくださったことに、この上なく感謝している。その道とは、これまでに培った知識や人脈を活かし、「非営利目的投資銀行家」として生き、世界最新の技術革新をもって、世にある未解決の課題の克服に資するよう、第一線にいる研究者たちと一緒に働くことだった。

今、私は東京大学の生産技術研究所、医科学研究所の先生方と一緒に仕事をしている。民間企業や他の大学の先生方にも集まっていたとき、研究資金を調達してイノベーションを起こすことで、新薬や医療機器、診断機器の開発、植物の新種の育種などが進むよう尽力している。私はこの仕事を引き受ける際に、経費の負担はお願いするものの、私自身は無給を申し出た。聖人の「財を捨てること」にはほど遠いが、これは、この小さき者でもできることだった。

非営利目的で尽くすことが、私にとつては非常に大事なことだった。神はこのようして「自分の（六十歳後の）時間と、才能（投資銀行家として培ったもの）」と、財（無給で働く）とを、世のために使う道」として私に与えられた。そして、これまで貯蓄した老後のお金は、「自分が稼いだ」と考えるよりも、このような道を歩ませるために「神が授けてくださったもの」と捉えれば、素直に、また謙虚に感謝することができた。そのような気持ちを抱いたとき、なんと幸いかな、「自分のために『もつともつ』 お金を稼ごう」という欲は、



アシジを見下ろす丘の上にある
聖フランシスコの像

自然ときれいに消滅していた。「収益を上げること」、また「世で名を成すこと」というプレッシャーからすっかり解放されたとき（言い換えると「自己中心の小さな圈において、つまらぬあれこれに支配されていること」から解放されたとき）、「フランチェスコ的な自由」とは何かを少しだけ理解できたように感じた。

ところで、非営利目的投資銀行家になるということ、突拍子もなく思いついたものではない。四十八歳で『ニューヨーク流 たった5人の「大きな会社」』（亜紀書房）という自著を出版したとき、「将来の自分の望み」としてこう述べていた。

「そして私の人生が、現在の投資銀行家として終わるとは考えていない。……最終的にやりたい仕事の姿は……もつと教育に参加することと、『非営利目的投資銀行』を設立することである。……私が目標とするものは、国も企業も対象としないが、世の中を公平にするために重要な事業……たとえば世界に数百人しかいない奇病を治す薬の開発などである」

実際、東大で最初に採り上げた案件は、米国企業・大学との共同研究によるALS（筋萎縮性側索硬化症）治療用の「横隔膜ペースメーカー」の次世代商品の開

発と、手や膀胱などの機能回復を電氣的刺激によってもたらす体内埋め込み型医療機器の共同開発となった。またエボラ出血熱のワクチン、お米で作る経口（薬品の冷蔵、注射器が不要）のコレラのワクチンなど、人類が必要とする貴重な新薬の開発で、私は資金集めや、商品化の道を拓く努力を先生方と一緒にしている。本件に着手したばかりのころは八方ふさがりとなり、親しい司祭にも相談した。恐らくその司祭も手を尽くし、お祈りしてくださいに違いない。いろいろ手探りで仕事を進めているうちに、手を貸してくれる方が現れ始め、だんだんと道が拓けることを、実感できるようになってきた。

このように、四十八歳のときに「将来の自分の望み」として記したことを、神は実際に六十一歳にして実現させてくださった。これは私にとつても、一緒に生きている妻にとつても、無上の喜びであった。「もつと、もつと」の人生を改め、「これでやっとまともな人生を歩める」と安堵したのである。

「なぜ私だけが？」という疑問

一方、「私はこんなに恵まれてよいのか」という疑

問もある。毎日のニュースに映る、戦火で家を失い、故郷を追われた難民の人々を前に、「なぜ私は難民の一人ではなく、こうした幸福な生活をさせていただけなのか」という疑問に対して、私は答えを見出せない。さまざまなチャンスは、「神が与えてくださった仕事」に間違いない。「なぜ神はこのような分不相応とも思える仕事を私に施してくださるのか」。畏れ多いほどの恵みに対し、自分自身に「怖れるな」と言いかけて取り組んでいるが、「なぜ多くの罪を犯してきたこの私に」という疑問に対する答えは、とても見出せない。

ところで、二〇一四年四月十三日、ブラジル・リオデジャネイロで開催されたワールドユースデーで教皇は若者たちに次のように語りかけられた。

「あなたが（清貧と謙遜の内に）心の扉を開き、イエスを受け入れるならば、そして喜びも悲しみもイエスと分かち合うならば、永遠の愛なる神だけがくださることのできる平和と喜びをあなたは味わうことになる」（私訳）

私は、教皇が述べられている「平和と喜び」を味わうことができたので、その証人になれる。この「味わ

い」こそが、辻邦生が書いた「自己中心の小さな圏から出て、聖フランチェスコ的な自由さの中に立つと、そのことだけで、すべてが歓喜の対象となる」ということではないのだろうか。

そして考える。もし社会のすべての人が、私を感じるような「平和と喜び」を味わうようになったならば、社会はどうなるだろうか——社会全体に平和が訪れる。神の国が実現する。ならば、その目標を達成するため、聖人も教皇もそのために生きた福音宣教を推し進めなければいけないのだ、と確信するのである。



みたに、ひでき ●米国ニューヨーク教区信徒。早稲田大学卒業後、旧任友銀行、ゴールドマン・サックスを経て、ロバート・ミタニLLCを創業。現在は東京大学生産技術研究所、同医科学研究所シニアアドバイザー。